



◀▲最後の一投を見事ストライクで締めた姫路は、三度目の正直でつかんだ今季初勝利に万感のガッツポーズ! 直後の優勝インタビューでは両目に涙が光っていた

大岡産業レディース [THE OPEN] トーナメント 2022

JPBA

7月30・31日 ポウルアロー松原店

三度目の正直! “女王”姫路が今季初V

を尻目に悠々トップシードを獲得。残る3枠は越智真南(51期)、久保田彩花(48期)、小久保実希(47期)の順でTV決勝ステップラダー(各1Gマッチ)進出者が確定した。

大会連覇でリスタートのV31

TV決勝のレーンは変化が激しく、久保田VS小久保の4位決定戦、越智VS久保田の3位決定戦はいずれもロースコアの決着となったが、姫路VS越智の優勝決定戦はともにノミスの好勝負に。今季、姫路は3月の関西オープン、2週前の六甲クイーンズで2度トップ進出を果たしながらV逸、対する越智も断トツの1位で決勝トーナメントに進出したラストチャンス。の新人戦でまさかの1回戦敗退と、悔しい思いをした雪辱を誓って相譲らず、試合は白熱した。

結果はダブル、ターキーを含めたストライ

クの数も、すべて9本カウントのスペアの数も同じながら、出したフレームの違いで1マークの差がつき、227:217で姫路の勝利。惜しくも初優勝を逃した越智だが、3オープンと苦戦した3位決定戦から一転、しっかり修正してアジャストし、最後まで女王に食らいついでみせたのは見事だった。

姫路も「越智プロは今いちばん初優勝に近いと思っている存在。本人もこのゲームでそれを実感したと思う」と若きチャレンジャーの健闘を称えつつ、次のように言葉をつないで女王のプライドをにじませた。

「観ている人に『若い選手を応援したい』と思われるような

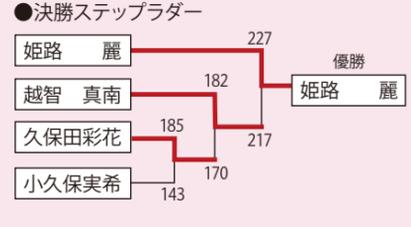
壁であることが今の自分の使命。私自身は、どのトーナメントにも『後はない。ここですべてを出し切る』と思って挑んでいます」

昨年末の全日本女子プロ選手権で節目のV30に到達して以来の勝利を大会連覇で飾った姫路。ここからまた、絶対女王の快進撃が始まりそうだ。

優勝ボール: ウルヴァリン・ミュータント(900GLOVAL) ABS



▲左から優勝・姫路、2位・越智、3位・久保田、4位・小久保の4プロとベストアマの石田万音選手(神戸六甲ボウル)。石田選手は8位進出のRR最終ポジションマッチで245を打って総合5位でフィニッシュ、現ユースナショナルチームメンバーの実力を見せつけた



今年で3回目を迎えた女子プロ公式戦「大岡産業レディース」は、オミクロン株BA.5の感染者激増で「大阪モデル非常事態宣言」が発出されたため、大会2日前に無観客開催の断が下されたが、競技は無事に行われ、“女王”姫路麗(33期・フリー)が今季6戦目にして待望の初勝利を挙げた。(主催:(公社)日本プロボウリング協会/特別協賛:(株)大岡産業)

☆
タフなコンディションで大半

の選手がスコアメイクに苦しみ、予選(3ステージ計16G)半ばまでは1G毎にトーナメントリーダーが入れ替わる混戦模様を呈した。姫路もスタートの6G中4Gでマイナススコアを叩き、第1ステージは31位と大きく出遅れたが、10G目に今大会唯一のパーフェクトゲームを達成して一気に盛り返し、上位8名中2位で決勝ラウンドロビン(RR)に進出した。

そのRRではさらに調子を上げ、8戦全勝で2位以下の混戦

FOCUS UP

ライセンスを持たない“放浪プロコーチ”有元勝氏の原動力は「あくなき探究心」



▲ありもと・まさる/1964年12月11日生まれ、福岡県出身。指導歴27年のプロコーチ。AMBA(有元メソッド・ボウリングアカデミー)代表

まるでカバンひとつ持って日本中を気ままに旅する“寅さん”のように、定住地を持たず、全国の格安ホテル・民泊を転々としながら、各地で「ボウリングキャンプ」と称するセミナーを開催したり、プロアマ・老若男女不問で個人レッスンを請け負っている人物がいる。皆さんは“放浪プロコーチ”有元勝氏をご存じですか?

☆

「プロのコーチになろうとは思っていませんでした。気がついていたらなっていた、という感じですね」(有元氏)

ひと昔前までは、地元北

九州市でBARを経営する傍ら、折尾スターレーンのリーグでボウリングに興じる一介のアマチュアボウラーだった。

子供のころから探究心旺盛で研究好き。大学生だった20歳のころに始めたボウリングにも「まず理論的にアプローチしていった」という有元氏は、当時からボウリングの腕前以上に“教え上手”なことで重宝されていた。

仲間に頼まれてその子供をコーチしたり、評判を聞きつけて遠方から指導を仰ぎにくるボウラーもいた。そのなかには元全日本ナショナルチームメンバーの和田翔吾選手や山上

英章プロ(51期)らがいる。

そんな有元氏に転機が訪れたのは2010年のこと。ひょんなきっかけで知己を得た故・すみ光保プロ(1期)から日坂義人氏(ヒサカプロショップ代表)を経て、氏の連載企画がボウリングマガジン誌(ベースボールマガジン社刊)に持ち込まれ、採用されたのだ。

「PBAスタイルの解析と日米ボウリングの比較考察論」と題したその連載は国内外で予想以上の反響を呼び、やがて全国のボウラーや関係者からコーチングや講師の依頼が舞い込むように。最初は1週間だった出張コーチが2週間、3週間と延びていき、店の経営との両立が難しくなるのに時間はかからなかった。

「しょっちゅう店を閉めていると、当然お客さんも来なくなる(苦笑)。コーチ業一本で生計が立つとは思えなかったけど、とりあえずやってみることにしました」

プロボウラーではない有元氏は、JPBAが認定するインストラクター資格を持たない。ゆえにその活動を快く思わない向きも少なくなかったが、すみ

プロや日坂氏をはじめ、福岡・青山エースレーンのオーナーだった故・染谷景一郎プロ(30期/JPBA前副会長)、LTBの榎田勝志社長らに有形無形の支援を得て、“業績”は年々右肩上がりに推移していった。

個人レッスンでは、クライアントの要望や目的に沿ったコーチングを心がけている。

「人間の探究心や向上心にキャリアや年齢は関係ありません。たとえば、70代シニアの女性選手が『もっとボールを曲げたい』と思っていたりするわけです(笑)。大抵のボウリング教室では取り合ってもらえないだろうけど、ボクはそれを否定しません」

異業種交流セミナーも

現在のボウリング業界では唯一無二の専業プロコーチとなって10年余り。時の流れとともに、その業態も少しずつ変化してきた。以前、2カ月に1回ペースで開催していたセミナーは、コロナ禍もあってオンライン開催が主力となり、そのぶん回数も増えた。大学教授やプロダンサーなど、各界で著名なゲスト講師を招いての異

業種交流セミナーが好評だ。

「自分のような人間が面白いと思ったり、興味を惹かれることに共鳴してくれる方が、他の業界にもいるんです(笑)」

異業種交流には思いがけない“気づき”もあり、自身の研究や知識をアップデートしてくれるという。ライセンスを持たないプロコーチ・有元勝氏の原動力は「あくなき探究心」だ。

「個人でやることには限界がある半面、組織にいれば稟議やら何やらでなかなか前に進まない物事が一存で実現できる。これからもボクはボクなりのやり方で、少しでもボウラーや業界の力になることができたらと思っています」



▲7月23日には「コーチングサミット」と銘打った異業種交流セミナーをオンライン開催。(左から)“体芯カ”トレーナー・鈴木亮司、有元、ダンスインストラクター・鈴木彩子、プロダンサー・稲吉優流の各氏が「指導と学び」をテーマに熱く語り合った